

令和 3 年 6 月 25 日現在

機関番号：13101

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2017～2020

課題番号：16KK0026

研究課題名（和文）北東ユーラシア未解明言語の記述と対照：相互影響の歴史的過程を解明する（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Descriptive and Contrastive Study on Languages of Northeast Eurasia(Fostering Joint International Research)

研究代表者

江畑 冬生 (Ebata, Fuyuki)

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：80709874

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,000,000円

渡航期間： 8ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究課題では北東ユーラシア地域に分布する未解明言語を研究対象として、これら諸言語が相互に影響を与えながらその文法構造を変えていった過程に関して、記述言語学と対照言語学を手段として解明する試みを行った。同地域の言語のうち、特にサハ語・トゥバ語・ハカス語（チュルク諸語）およびエウエン語・エウエンキー語（ツングース諸語）に焦点をあて、形態音韻規則の規則性・文法形式の義務性・形態法上の特徴・証拠性関係接辞の用法・膠着性の度合いに関する地域類型論的研究において新たな成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新潟大学で開催した二度の国際学術大会では、日韓中露の研究者による最新の知見を交換することができた。2018年の韓国言語学会夏季大会（忠南大学）と2019年の第14回国際アルタイ学会（全北大学）での口頭発表と質疑応答により、韓国のチュルク諸語・ツングース諸語の研究者からのレビューを受けることができた。金周源「韓国のアルタイ諸語研究の現状と展望」を翻訳・出版することにより、韓国のアルタイ諸語研究の蓄積と進展を日本の研究者らに紹介することができた。今後も引き続き、北東ユーラシア地域の消滅危機に瀕した少数民族言語の解明という課題に日韓の研究者が連携して取り組むことが見込まれる。

研究成果の概要（英文）：This research project targets the minority languages spoken in the Northeastern Eurasian area, and aims to explore the language change process through language contact using descriptive and contrastive approach. This project particularly focuses on Sakha and Tyvan (Turkic family) as well as Even and Evenki (Tungusic family), and tries to illustrate areal-linguistic properties including regularity of morphophonological process, obligatoriness of grammatical elements, morphological characteristics, use of the so-called evidential suffix, and degree of agglutinateness.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学 言語類型論 対照言語学 チュルク諸語 ツングース諸語 形態法 証拠性 膠着性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

北東ユーラシア地域には、系統の異なるいくつかの言語が分布している。これらは話者人口の小さい少数民族言語であり、中国語やロシア語などの大言語の強い影響を受け続けている。つまりこれらの言語は、言語構造の急激な変化と話者の消滅の危機に晒されている。にもかかわらず、これらの諸言語の大半は十分な記述が残されているとは言えない状態である。同地域の言語の正確な姿を記述していくことは、現代の言語学者の急務である。

近年、日本および韓国の言語学者たちが、北東ユーラシア地域において現地調査による少数民族言語研究を精力的に行っている。本研究課題の海外共同研究者である金周源教授（ソウル国立大学）は、北東ユーラシア地域での現地調査による少数民族言語研究の韓国における第一人者であり、同大学言語学科のメンバーや国際アルタイ学会の研究者らとともに、シベリア地域でのフィールドワーク調査を精力的に積み重ねてきている。日韓の研究者の最新の知見を融合することにより、北東ユーラシア地域の諸言語の正確な姿を明らかにするのみならず、言語接触による相互影響の歴史的過程の解明が大きく進展することが期待される。

研究代表者は基課題である若手研究(A)「チュルク諸語北東グループ未解明言語の調査研究：包括的記述と史の変遷の解明」において、北東ユーラシア地域に分布する3つのチュルク系言語（サハ語・トゥバ語・ハカス語）を研究対象とした。これらの言語の特質、とりわけ歴史的変遷の過程を明らかにするには、周辺の異系統の言語の研究成果を取り入れる必要がある。韓国の研究者によるロシア少数民族言語の研究は、極めて高い水準にある。特にサハ語に大きな影響を与えたとされるツングース諸語の調査研究にかけては最先端である。

研究代表者は、2008年以降、韓国の国際アルタイ学会に続けて参加し口頭発表を重ねてきた。2016年7月には、新潟大学において国際ワークショップ“Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia”を主催し、日本・韓国・ロシアの記述言語学と対照言語学に携わる専門家らを招聘した。このような研究活動を基盤として、本研究が対象とする北東ユーラシア地域の諸言語の解明が進めば、広く北東ユーラシア諸言語の類似点と相違点を描く言語類型論的な研究へ発展しうることが予想される。

2. 研究の目的

本研究課題では、同じく北東ユーラシア地域でフィールドワークを行う研究代表者と韓国の海外共同研究者の共同研究体制により、同地域に分布する諸言語の相互影響による歴史的過程の解明に焦点を当てた研究を行った。具体的には、以下の3点の課題に取り組んだ。

- (1) 北東ユーラシア地域の諸言語のうち、未解明部分の大きいサハ語・トゥバ語・ハカス語の文法構造を、現地調査を行い包括的に記述する。
- (2) 周辺のツングース諸語との対照を踏まえながら、サハ語・トゥバ語・ハカス語の文法構造間の相違点と類似点を検証する。
- (3) 海外共同研究者とも連携しながら、北東ユーラシア地域の諸言語が相互分岐と相互接触を繰り返しながら文法構造を変容させてきた歴史的過程を解明する。

3. 研究の方法

本研究課題は国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）の1つであり、海外の研究機関で行う国際共同研究として位置づけられている。研究代表者は、2018年2月から9月にかけて、大韓民国のソウル国立大学に滞在し研究活動を行った。その後も、海外共同研究者と緊密に連絡を取り合いながら共同研究を進めた。特筆すべき研究活動として、新潟大学において国際学術大会を2度開催した。また韓国で開催された学会（オンライン開催含む）において口頭発表を行うなどして、韓国の研究者らとの活発な意見交換を行った。

4. 研究成果

本研究課題では、北東ユーラシア地域の少数民族言語研究分野での韓国における研究の進展を吸収するだけでなく、2018年の韓国言語学会夏季大会（忠南大学）と2019年の第14回国際アルタイ学会（全北大学）での口頭発表と質疑応答により、韓国のチュルク諸語・ツングース諸語の研究者との有益な意見交換を行うことができた。新潟大学で開催した二度の国際学術大会では、日本・韓国・中国・ロシアの研究者による最新の知見を交換することができた。金周源「韓国のアルタイ諸語研究の現状と展望」を翻訳して公刊することにより、韓国のアルタイ諸語研究の蓄積と進展を日本の研究者らに紹介することができたことも大きな収穫であった。今後も引き続き、北東ユーラシア地域の消滅危機に瀕した少数民族言語の解明という課題に日韓の研究者が連携して取り組むことが見込まれる。

研究期間における各年度ごとの主な研究内容および得られた研究成果は、以下の通りである。

- (1) 2017 年度（平成 29 年度・1 年目）には、本研究課題による韓国滞在を 2018 年 2 月に開始した。滞在先のソウル国立大学言語学科では、毎週木曜日に開催されるソロン語研究会（金周源教授らに加えてソウル国立大学国語学科在籍のソロン語母語話者も参加）に出席し、本研究課題のテーマの 1 つであるチュルク諸語とツングース諸語の言語接触に関連する言語現象について理解を深めることができた。韓国言語類型論学会の年次学術大会（2018 年 2 月）および定例研究会（隔週月曜日）に参加することで、韓国での言語類型論研究における最新の知見を得られたことも大きな収穫であった。この年度の主な研究成果は、2018 年 3 月に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催された国際学会 “Current Topics in Turkic Linguistics” における口頭発表などである。
- (2) 2018 年度（平成 30 年度・2 年目）の前半には、引き続き韓国に滞在し研究活動を行った。滞在先のソウル国立大学では、金周源教授の計らいにより、2018 年 5 月からの 1 年間の間、人文学研究所の客員研究員の身分を得られることになった。このことにより、ソウル国立大学の図書館利用に関して煩瑣な手続きをしなくても済むようになった。また人文学部のアルタイ学研究所に所蔵の貴重なコレクションである成百仁文庫（成百仁名誉教授の元蔵書）の閲覧を許されたことも、研究遂行上で大いに役立った。9 月末に韓国滞在を終えた。この年度の主な研究成果は、2018 年 6 月開催の韓国言語学会夏季大会（忠南大学）における口頭発表および同月開催の日本言語学会第 156 回大会（東京大学）における口頭発表などである。2018 年 11 月には、新潟大学において国際学術大会 “Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2” を開催し韓国の研究者らを招聘した。
- (3) 2019 年度（平成 31 年度・3 年目）には、まず 4 月に新潟大学において国際学術大会 “Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3” を開催し韓国の研究者らを招聘した。一方で研究代表者は、2019 年 7 月開催の第 14 回国際アルタイ学会（全北大学）や 2019 年 12 月開催の韓国国語学会 60 周年記念冬季学術大会（ソウル国立大学）に参加することができた。この年度の主な研究成果は、2020 年 3 月に出版した単著『サハ語文法：統語的派生と言語類型論的特異性』（勉誠出版）である。2020 年の 2 月から 3 月にかけて、ソウル国立大学に滞在する予定であった。しかしながら新型コロナウイルス感染症の問題が発生したため、参加予定であった韓国言語類型論学会が中止になるなどの事態が発生した。そのため当初の予定を変更し滞在期間を大幅に短縮するとともに、年度末には研究期間の延長申請を行った。
- (4) 研究期間延長を行った 2020 年度（令和 2 年度）には、状況が許せばソウル国立大学に短い期間滞在し現地での研究活動も行う予定であった。ところが新型コロナウイルス感染症問題が引き続き改善しないため、日本国内のみでの研究活動を余儀なくされた。ただしオンライン開催された国内外の研究会・学会の場において成果発表を行うこともできた。そのうち韓国で開催されたものとしては、2020 年 12 月開催の 2020 世界韓国語大会および 2021 年 1 月開催の韓国言語類型論学会第 13 回国際学術大会の 2 つがある。この年度の主な研究成果は、上記 2 つの国際学会での招待講演および金周源「韓国のアルタイ諸語研究の現状と展望」の共訳（『北方言語研究』第 11 号所収）である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 2
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の主題マーカ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 10
2. 論文標題 Agglutinativeness, polysynthesis and syntactic derivation in Northeastern Eurasian languages.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 1
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の疑問詞疑問接辞の対照	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北東アジア諸言語の記述と対照	6. 最初と最後の頁 167-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 9
2. 論文標題 トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dirの機能：話し手・聞き手の認識からの説明	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 13
2. 論文標題 Regularity and obligatoriness in Sakha (Yakut). A contrastive analysis with Tyvan.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア・アフリカの言語と言語学	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 江畑 冬生	4. 巻 9
2. 論文標題 表音文字の非表音性：サハ語と現代韓国語の対照を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語の普遍性と個別性	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 Contribution from descriptive and contrastive approach to historical study: A case from the Turkic language family.
3. 学会等名 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki and Syuryun, Arzhaana
2. 発表標題 A contrastive study on the WH-question suffixes in Sakha and Tyvan.
3. 学会等名 The 14th Seoul International Altaistic Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 言語類型論・個別言語研究における証拠性：韓国語とトゥバ語を例に
3. 学会等名 言語の類型学的特徴をとらえる対照研究会 第11回公開発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 北東ユーラシア諸言語の膠着性・複統合性と統語的派生
3. 学会等名 日本北方言語学会第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 言語類型論と周辺諸言語から見た日本語形態法
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 言語類型論的視覚から見た韓日語とアルタイ諸言語の形態法
3. 学会等名 韓国国語学会60周年記念冬季学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 The so-called evidential suffix -dir in Tyvan: Explanation from the perspective of the speaker's and the hearer's knowledge
3. 学会等名 韓国言語学会2018年度夏季学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dirの機能：話し手・聞き手の認識からの説明
3. 学会等名 日本言語学会第156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑 冬生
2. 発表標題 トゥバ語における疑問詞疑問接辞の否定文での用法：egophoricityからの説明
3. 学会等名 日本言語学会第157回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 Regularity and obligatoriness in Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Tyvan.
3. 学会等名 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 From Turkic locative to Sakha partitive: A contrasting analysis with Tyvan, Tofa, Dolgan and Evenki.
3. 学会等名 Current Topics in Turkic Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 江畑 冬生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 260
3. 書名 サハ語文法：統語的派生と言語類型論的特異性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	金 周源 (Kim Juwon)	ソウル国立大学・人文学部・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2	開催年 2018年～2018年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------